

■concept

電鉄魚津駅にほど近い魚津市文化町

かつての人も今は少なくなり、空き家や空き店舗が増加しているこの地域は魚津市において「都市機能誘導地域」及び「居住誘導区域」に設定され人口密度を維持することにより生活サービス及びコミュニティの維持が図らうとされている地域である

地域住民の弱くなってきた「縦糸」を繋ぎとめるにあたり魚津市の取組みと別の次元でUIJターンの若者にこの地区の「縦糸」となってもらうことを提案したい

提供する住宅は1DKの極小住宅
そのため、単身、あるいは子どもいない夫婦を住まい手として想定している
ただし職住隣接の住宅
塾や教室、カフェ等、地域住民と直接交流しうる職種に限って募集を行う

この職のためのスペースをコミュニティスペースと空間的に重複させることが異なる年代層や異なる背景を持つ地域住民を繋ぐ

この住宅の住まい手には、以下の3つの条件を守ることを前提にこの住宅を無料あるいは低賃金家賃で貸し出す

1. この住宅に設けるコミュニティスペースを地域住民に開放すること
2. この住宅に設けるコミュニティスペースを適切に維持管理すること(光熱費及び修繕費は市負担)
3. 3年程度の一定期間の後に退去すること

この提案は住まい手に対し募集時点からずっとこの地に住み続けてもらうことを強要するものではない

住まい手自身の職に対しての合う合わない
富山との、魚津との、この地域との合う合わない
地域住民との合う合わない

一人の人間であれば当然であるであろうこれらに関する「お試し」をこの地区の人の交流を促すきっかけとして空き家を活用する

もし、住まい手がこの地域を気に入ってくれたのであれば退去後に周辺空き家を改修して移り住んでくれれば・・・
(足立だが、この際に市で空き家探しの助力及び改修費用の補助を行えばより効果はあがる)

ここまでの一連の流れにより最終的にはこの地域に真に必要な人材が確保されるであろうしこの過程で地域住民と地域外から来る住まい手とが日常生活レベルで直接交流していくことで地域住民がこの地域に真に必要なものは何かを自身で考えるきっかけにもなる

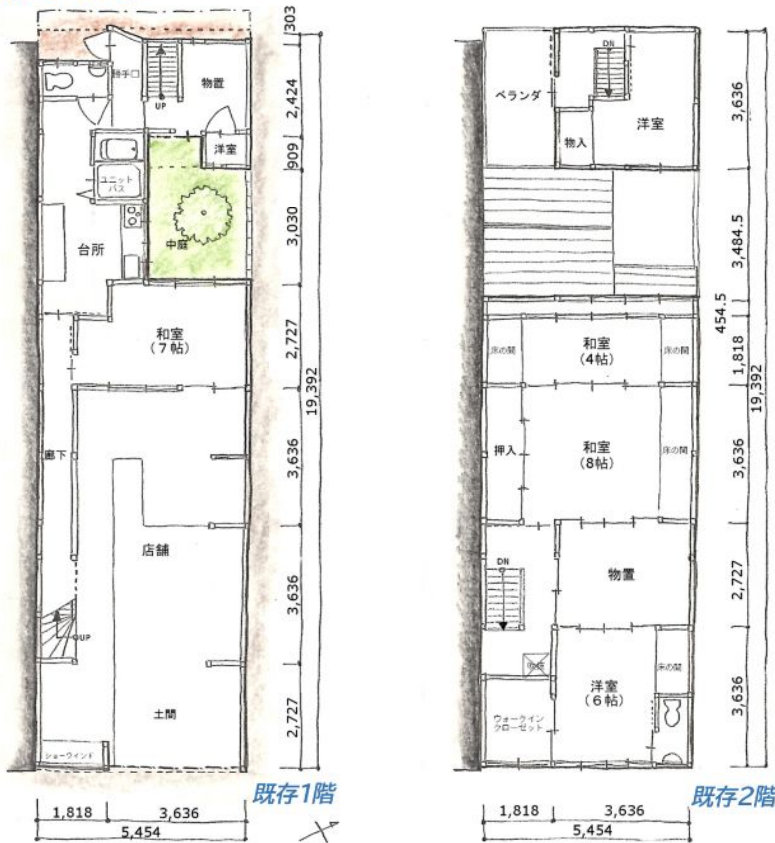
今、全国各地で急増する空き家への対策は地域ぐるみで向き合わなければならない急務であるしかし、あえてこれをピンチではなくチャンスととらえたい多層的な意味づけによって流れを展開させることで地域住民の意識や地域の独自性を盛り起こす可能性が眠っていると考える

この提案が地域住民及び関係各位に今までよりも少しだけ視界を広くする契機となればありがたいと思う

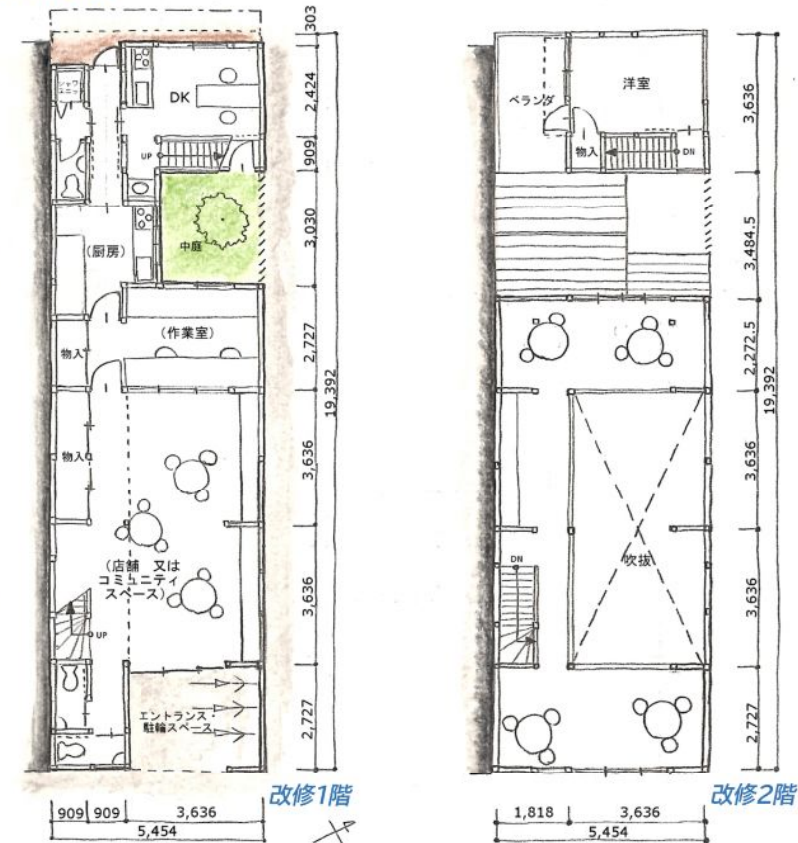
■guide (計画地：魚津市文化町)



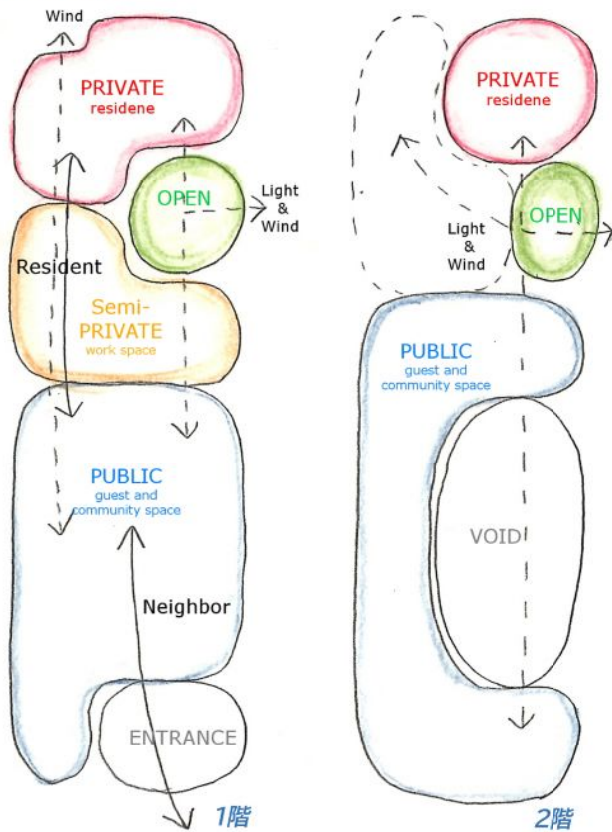
■plan(before)



■plan(after)



diagram



広い吹抜けを通して1階と2階を緩やかにつなげる
 各部の東西のスペースは個別的スペースとしての使用も可能
 量と敷いて合理的な使い方も想定している
 1階には本階を設ける
 利用者から不要となった本を提供してもらい
 利用者が自由に閲覧できることとし
 地域の人々がつながるきっかけの一つとする



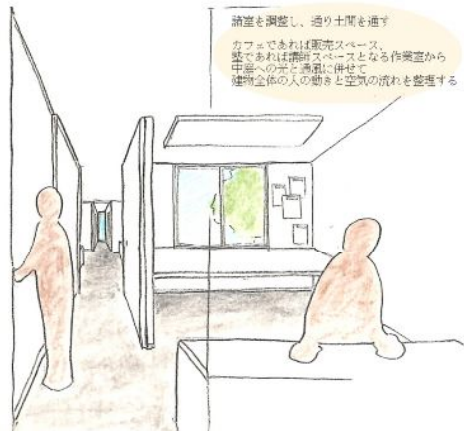
内観(吹抜け見下し)



昔ながらの町家に思われる中庭は
 通風、換気のためになくてはならない空間である
 取り巻く全ての諸室に潤いを与える樹木は
 固定してそのまま残す
 隣地とのブロック塀は
 空気の流れを遮らないルーバーとして
 居住性を向上させる

中庭

納室を調整し、通り土間を通す
 カフェであれば販売スペース、
 室であれば書庫スペースとなる作業室から
 中庭への立ち通りに併せて
 建物全体の人の動きと空気の流れを整理する



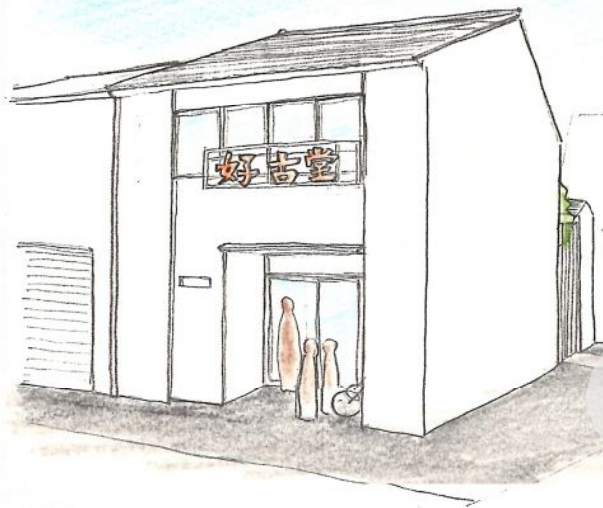
内観(作業室及び通り土間)

2階部分も本館に調性し
 開放的な空間をつくる
 ここは住まい手が形成とつながり
 地域の人々の地域の中心となる場所
 この建物の核となる場所である
 そのための象徴的な空間に改修する
 一方で、耐震性を確保するために
 壁柱と梁を地味素材で付加する



内観(吹抜け見上げ)

perspective



外観

大正12年築の歴史を持った建物
 解体時に、当時の価値を売つけられれば
 できる範囲で償却させ、地域に記憶を残すたい
 一方で予算と耐久性及び法的な問題を
 折り合いをつけなくてはならず
 この作業において
 全壊後などの外装を想定しているが
 少しでも記憶を残すため
 せめて店舗の看板を残すこととする

はじめは × つながる in UOZU